

平成 22 年度

**あいち多文化共生作文
コンクール入賞作品集**

【優秀賞（小学生の部）】

豊田市立西保見小学校 6年 ^ほ許 ^へ ^{じん}恵 眞「みんな地球の子」 P 1

【優秀賞（中学生の部）】

みよし市立三好丘中学校 3年 ^{やま} ^だ山 田 ^{じゅ} ^り純 里「国境のない友達」 P 2

【佳作】

豊田市立西保見小学校 6年 ^{あお} ^き青 木 ^{はる} ^み春 美「新しい発見！今、自分にできること」 P 3

知立市立知立東小学校 6年 ナカヤマ ナタリア「日本人とブラジル人が支え合うために」 P 4

滝中学校 1年 ^{きた} ^{がき}北 垣 ^ゆ ^め ^の佑 芽 乃「二語からの出発～はじめての外国のおともだち」 P 5

刈谷市立依佐美中学校 2年 ^{すず} ^き鈴 木 ^{けん} ^た健 太「文化を受け入れる」 P 6

豊田市立保見中学校 3年 ^つ ^{づき}都 築 ^ち ^な ^み知 奈 美「外国人だからこそ」 P 7

【優秀賞（小学生の部）】

みんな地球の子

豊田市立西保見小学校 六年 許 恵眞

私は、韓国人。一年生のときに日本に来了。私は、日本語もしゃべれず、友達もできなかった。私の名前は、「恵眞（へじん）」。「神様から眞の恵をもらい、幸せになってほしい」と願いを込めてつけられた名前だ。その私の名前を男の子には、

「うわあ、へんじんだ！」

とからかわれて、とても悔しかった。でも、学校を休みたくはなかった。学校で楽しく過ごすためには、日本語が話せるようにならなければならないと思った。私は、親の仕事の都合で日本に来了。また、韓国に戻るのではなく、日本で住み続けるのだ。私は、日本で暮らすためには、勉強をがんばらなければいけないと思った。だから、私は、学校だけではなく、家でも本を使って、一生懸命に勉強した。日本語が話せるようになると、だんだんみんなが、私に近づいてきてくれるような気がした。二年生には、学級委員にもなり、大きな仕事もできるようになった。親友もでき、学校が終わっても遊ぶようになった。

でも、やっとみんなと仲良くなれたと思ったら、また親の仕事の都合で転校することになった。それが、今の私の学校、西保見小学校だ。西保見小学校には、外国の子がいっぱいいるということを聞いて、少しほっとした。そこに韓国人がいるかも知れないと思ったからだ。西保見小学校での一日目、私は、わくわくしながら学校へ行った。もちろん、どきどきもしていた。教室に向かう時、すれ違った子が優しくあいさつをしてくれた。私は、びっくりして、小さな声でしかあいさつが返せなかった。でも、その子は、私のあいさつを笑顔で受けとめてくれた。私は、この時、「きつと、この学校のみんなは、優しい！」と思った。私は、教室に入って自己紹介をした。周りを見ると、すごくいろんな人がいた。目が青い人、かみの毛が茶色い人、背がすごく高い人、色の黒い人、白い人。私は、「こんなにいろいろな人と友達になれるのかなあ？」と思った。一時間目が終わった時、みんなが、「友達になろう！」「仲良くしてね。」と、声をかけてくれた。私は、うれしかった。韓国人はいなかったけれど、残念ではなかった。こんなに、友達になろうと言ってくれる子がたくさんいるのだから。

私には日本人の親友がいる。彼女は、私の気持ちを考えながら話す。私は、自分の伝えたいことをストレートに伝えることが多い。韓国では、当たり前だが、言葉の伝え方が難しく、気持ちがすれ違い、けんかになった事もある。私も相手の気持ちを考えた言い方に気をつけてきた。今は、すれ違いもけんかも少なくなり、親友以上の友達になった。

学校の入り口には、「手をつなごうばくも私も地球の子」というスローガンがかかっている。確かにみんな少しずつ違ふところもあるが、私も親友も、そして教室の仲間、みんなが地球の子なのだ。みんなが、仲良く笑顔で過ごせる西保見小学校は、私の自慢の学校だ。

【優秀賞（中学生の部）】

国境のない友達

みよし市立三好丘中学校 三年 山田 純里

「See you tomorrow」

私が日本に帰ってしまう日にモーラが言った言葉です。5年たった今でもこの日のことは鮮明に覚えていています。

私にはモーラというアメリカ人の親友がいます。5歳のときに出会い、私の人生の中でおそらく初めて心から信頼できる友達となった人です。仲良くなっただけは家が近所だったことです。アメリカはすぐく近所付き合いがよかったので、近所に住んでいる人たちだけで一カ月に一度は誰かの家のプールでパーティをしたり庭でバーベキューしたりしていました。引越してきてすぐの時も近所のみんなでパーティをやりそこでモーラと出会いました。

友達になってすぐの頃は私が英語をまだ全然喋れないので会話はあまり成り立っていませんでした。モーラと遊んでいると一時間に何度も150m程離れた自分の家に帰ってモーラが言っていた言葉がどういう意味かお母さんに聞いて、理解したらまた150m全力疾走してモーラの家に戻りました。そのため遊ぶ度に足が結構疲れていました。

私とモーラは学校も一緒でした。始めて学校へ行くまでは本当に未知の世界だったので不安で仕方がありませんでした。英語がまだほんの少ししか喋れない私なんかがみんなと仲良くしたり、一緒に勉強することなんてできるのかな…と行く前の日、悩んだのを覚えています。でも私の通っていた学校はメキシコやフランス、中国などいろんな国から来た人が多かったので始めの頃は「あっ日本人だ。」という目で見られましたが、数週間たつと他の子との壁もとれて仲良くすることができました。アメリカの学校は本当に自由で制服とかもなかったもので、それぞれの子の個性がとても強かったです。いろんなタイプの子がいるのでいろんな子と友達になり会話することができました。

アメリカの子たちと一緒にいて思ったことがあります。それはみんな自分の考えをしつかり持っていることです。思ったことはちゃんと口に出すし、何よりもみんな自分の夢というものがみんなしつかりと決まっていました。特にモーラはそうでした。いやなことがあるとはっきりと「いやだ」と言いますし、嬉しいことがあると「人間ってこんなに嬉しさを表現できるんだ。」と思うくらいすごく嬉しい顔をしていました。そして自分の夢というものを持っていて、その夢に向かって日々努力していました。モーラのそういうところを私はとても尊敬していました。

モーラが一番いいところ、それは「フレンドリー」なところなんです。人見知りがあったくなく、誰にでも「Hi」と気軽に話しかけちゃうような子です。それまで結構、人見知りだった私をモーラが変えてくれました。モーラと一緒にいるといつも笑顔でいらしたし、私自身もモーラと仲良くなったおかげで明るくなれた気がします。

私が日本に帰ってしまう日、当日。私とモーラは至って今までと変わらない普通な感じで別に泣くこともなくお別れをしました。でも最後、車に乗ってモーラの家を去るときモーラが私に向かって、

「See you tomorrow」

と叫びました。明日からはもう当分会えないのにそうやって言ってくれたのがすごく嬉しくて、車の中でたくさん泣いたのを覚えています。

モーラと離れ離れになって5年がたちます。モーラは今高校生です。私たちは海を跨いで何千キロも離れた場所に住んでいます。でもいまでも手紙交換をしたり、メール交換をしていて信じられる大好きな親友です。

モーラと出会って、モーラに教えてもらったことがたくさんあります。それは、自分の意見ははっきり言うこと、人見知りをせず誰にでもフレンドリーに話しかけること、そして…友情には住んでいる国も人種も話す言語も関係ないと言うことです。

これからの生活の中で私はさまざまな性格のさまざまな人種の人に出会っていくと思います。そのときは日本人に対しても外国人に対しても積極的に話しかけ、たとえ言葉が通じなくても自分からコミュニケーションをとろうとしたりして、いろんな人と交流を深めていきたいです。

【佳作】

新しい発見！今、自分にできること

豊田市立西保見小学校 六年 青木 春美

日本にいる限り「日本語」は自分にとって大きな武器になる！これは、去年「夢をもつ会」で私達に話をしてくださったロドリゴさんの言葉です。私は、ブラジル人です。日本で生まれて日本で育ちました。保育園に入るまで、ポルトガル語を話していましたが、保育園でたくさんの友達や先生と過ごす中で、日本語を覚えました。ロドリゴさんは、十歳の時、ブラジルから来日し、日本語がわからないまま日本の学校に入ったそうです。言葉が何もわからない状態で、新しい世界に入っていくのは、どんなに不安だったろうと思います。ロドリゴさんは、今、保見中学校で英語の先生をしています。「日本で自分の夢をかなえていくためには、日本語で勝負していかなければならない！」だから、人の何倍もがんばってきたそうです。私は、日本語をこんなふうに変えたことは、一度もありませんでした。でも、この話を聞いて、自分も、もっと、もっと日本語を身につけていかなければいけないんだという事に気づかされました。

私の通う西保見小学校は、半分以上の子が外国人です。その中には、日本語がほとんど話せず、学校に来るのを不安に思っている子もいると思います。私は、休み時間には、一年生の子と運動場で遊んだり、図書室で本を読んであげたりしています。これまでの私にとって、日本語がわからない子には、ポルトガル語で話しかけるという事は、当たり前でした。ある日、先生が、「日本語がわかるようになることは、その子の安心につながっていくのです。日本語がわからない子がいたら、すぐポルトガル語で説明するのではなく、もう一度ゆっくり、短い日本語で説明してあげよう。それでもわからなかったら、ポルトガル語で助けてあげよう。」と言われました。私は、「本当にそれで、日本語のわからない子に伝えられるのかな。」と思いました。

縦割りのふれあいタイムで、ドッジビーをしました。班の一年生の子はゲームのやり方がわからず、私にポルトガル語で聞いてきました。私は、日本語で説明をしました。よく伝わりませんでした。だから、私は、ポルトガル語で説明しようと思いました。けれど、先生の言われたことを思い出し、動作をしながら、日本語でもう一度説明をしました。そうしたら、「わかった！」とうれしそうな顔をしてくれました。私は、ほっとしました。

私には、日本人の友達もブラジル人の友達もたくさんいます。今は、日本語がわからない子も、日本語が上手に話せるようになったら、たくさんの友達ができ、もっと楽しく、安心して生活できるようになると思います。日本語が上手に話せるようになるのかは、その子の努力も大切だけれど、日本語を積極的に使おうとする周りの環境も大切だと思います。ポルトガル語も日本語も話せる自分だからこそ、できることだと気づきました。どんなふうにしたら、本当に一年生の子たちのためになるかを考え、声をかけたいと思います。

【佳作】

日本人とブラジル人が支え合うために

知立市立知立東小学校 六年 ナカヤマ ナタリア

私は知立東小学校の六年生です。三年生のころに日本にきました。日本にいる母が、命にかかわる病氣になったからです。

日本の学校に入る時、日本語がまったく話せなかったし、日本の文化や歴史など、全然わかりませんでした。だからいじめに合うかもしれないと思いました。でも、日本に来てみるとちがつていました。東小で会った日本の子供たちは、とても思いやりがあり、優しくかったです。東小学校は、児童数は少ないけれど半分近くは外国人のいる学校です。そして外国人の約九十%が私と同じブラジル人です。ブラジル人が多いことも、私の不安を消してくれました。東小学校は、ブラジル人と日本人がとても仲のよい学校です。外国人だからといって人をいじめることはありません。

では、私達ブラジル人と日本人は、本当に心を開いた仲になれるのでしょうか。私達には言葉のかけがあります。私は、一生けん命に日本語の勉強をしています。が、まだまだ分からない言葉がたくさんあります。だから、自分が悲しかったり、腹が立ったり、悩んだりした時には、ブラジル人に気持ちを伝え、相談します。ブラジルの友達と話をするとほっとします。日本の子も同じだと思います。うまくいかないことや、けんかした時など、日本人とブラジル人が分かれてグループになり、それぞれの言葉で話しているところを見ます。さらにもう一つ、民族的な気質の違いがあります。ブラジル人は、とても明るく、思っていることを言葉や体で表します。でも、日本人のように、人に対して思いやり、心ばいをするのが苦手です。一つのことを真面目にきちんとやることや、時間を守ることも苦手です。日本人は、なかなか自分の意見をどうどうと言わないし、腹が立ったことを自分の中で納めてしまい、相手にはつきりとした態度を示さないことがあるように思います。そんなちがいから、どうしても心のかべができてしまいます。しかし、私は今、ブラジル人と日本人が、相手をもっと知ろうとすることが大事だと思っています。知りたい人が聞けば、日本の子はちゃんと教えてくれます。日本の子が聞けば、ブラジルの子も教えます。言葉のかべをこえて分かってすることは大変なことなので、聞くことすらあきらめてしまう人がいます。でも、私は、日本人もブラジル人も、お互いに知ろうとして交われば、民族どうしのかべは少しずつ小さくなり、支え合って生活できるようになると思います。

私の夢は、女優になることです。私は、母を救ってくれたお医者さんのいる、しっかりとした環境の中で働ける日本が好きです。だから、できれば日本の中学、高校、大学と進学し、日本でもブラジルでも活躍できる女優さんになりたいです。たくさん日本の友達やブラジルの友達に支えてもらい、夢に向かってがんばっていききたいです。

【佳作】

一語からの出発

滝中学校 一年 北垣 祐芽 乃

最近、街中やショッピングモール、駅などで、多くの外国人を見かけます。私の住む大垣でも特にブラジル人や中国人が増えてきました。しかし、彼らはそれぞれ同じ国の人で仲間をつくり、日本人と積極的に交わることが少ないように感じます。彼らの多くは日本語を話すことができません。もちろんほとんどの日本人が中国語もポルトガル語もできないのですからうまくコミュニケーションがとれないのはあたりまえかもしれません。しかし、私は、外国の人と接するときが一番大切なのは、言葉が通じるかどうかということよりも、相手の文化や心を理解しよう、理解したいという気持ちがあるかどうかだと思います。

私は保育園に通っていた時に、はじめて外国の人とふれ合う機会に出会いました。まだ四歳だった私たちの前に突然ブラジル人の転入生が現れたのです。日本語さえまならない私たちに先生は二つのポルトガル語を教えてくださいました。

「オブリガード」ありがとうございます

「ボンジア」おはよう

たった二つのポルトガル語で、転入生との園生活がはじまったのです。

落ちたペンを拾ってくれた、おもちゃを片付けるのを手伝ってくれた、などちよつとしたことでもとびっきりの笑顔で

「オブリガード！」

通園中に会ったら手を大きく振って

「ボンジア！」

友達になりたい、というお互いの思いから、それが日常になっていきました。

もちろん、この二語以外、ポルトガル語は分かりませんでしたから、そのほかは相手にはよく通じないであろう日本語で話しかけていました。

「一緒ににおにごっこしよう。」

と言って手をつなぎました。ルールも日本語とジェスチャーで一生懸命説明をしたりしました。

「一緒にお絵かきをしよう。」

と言ってスケッチブックと色えんぴつを渡したりしました。だんだんと慣れてきて日本語も少しずつ話すことができるようになると、みんなでおしゃべりしたり、遊んだりすることも増えました。幼稚園を卒園する日、配られた卒園アルバムのその子のページには

「みなさん とてもだいすき どうもありがとう」

と書かれてあったのです。私はとてもうれしい気持ちでいっぱいでした。文化も言葉も全く違う人と思いが通じ合ったのですから。

このようなことがあったのも、保育園の時に、お互いを理解しようとし、尊重し合うことができたからだだと思います。お互いが分かり合える言葉がたった二語だったとしても、思いを届けたい、思いを通じさせたい、という気持ちがあると、日本人同士はもちろん、言葉が全く通じない外国の人ともこんなによい関係を築くことができるということがこの経験を通して私が学んだことです。

これからも、外国の文化などを理解し、世界中の人々とこのような関係を築くことができたらいいな、と思います。さらに、その関係によって、社会がさらに発展し、平和への道へと進むことができたなら、なお素適ですばらしいことだな、と感じ、実際にその道を歩んでいきたいです。

【佳作】

文化を受け入れる

刈谷市立依佐美中学校 二年 鈴木 健太

僕は幼稚園の年中の時に、父の仕事の都合でアメリカに住むことになった。当時五歳だった僕は、アルファベットやあいさつを知っている程度で、先生や友達の話していることは全く理解できなかった。そんな僕を友達は大カにしたりしなかった。僕が分からないことは、丁寧に英語でゆっくり話しながら、ジェスチャーで説明しようとしたり、実際にやったりして手本を見せてくれた。英語は分からなかったけれども、伝えようとしていた事が少しずつ分かるようになっていった。そこから英語の言葉の意味も、少しずつ理解できるようになった。こうしてみんなのお陰で、徐々に先生の話も分かるようになり授業についていけるようになっていった。そして僕以外の色々な国から来た子供にも、周りの子達は同じ様に接していた。どこの国から来たか、どんな言葉をしゃべるかは問題ではなかった。

また僕が住んでいた所には、町内会のようなものはなかった。けれども、近所の人達はお互いを気にかけて合い、あいさつはもちろん日常的に交流していた。運よく僕達は、このような住みやすい地域に行くことができた。異なる人種だから交流しないわけでもなく、同じ人種だから交流するわけでもなかった。このような関係はお互いに違いを受け入れ、尊重し合いながら関わり合っているように思っていたからこそ、築き上げることができた関係だと思う。しかし地域によっては、住民達の間ほとんど交流のない地域もあったようだ。

ある時、僕は友達の家に行った。家に入るために、靴を脱ごうとしたら、
「靴をはいたまま入って。」

と言われ、びっくりした。今までは、靴のまま家に入るなんて悪いことだと思っていた。その子の家ではみんな靴をはいたままだったので、少しアメリカ人の仲間入りをしたような気分であれしかった。

そして友達が僕の家に来た時には、靴を脱いでもらった。友達は嫌がらずに靴を脱いでくれた。

次に友達の家に行った時には、今度は友達から、

「僕の家でも靴を脱いでみようよ。」

と言われて、一緒に靴を脱いで遊ぶことにした。お陰で僕等の靴下は真っ黒になったけれども、友達のお母さんが、

「家の床がきれいになっていいわ。」

と笑っていた。あの時、僕等は無理に相手に合わせようとしてはいなかった。僕達はお互いの習慣の違いを、むしろ楽しんでいた。

では、日本ではどうだろうか？六年生になり、僕は日本の小学校に戻ってきた。最初は先生や一部の友達くらいしか、僕には話しかけてこなかった。僕は日本語がしゃべれたから良かったものの、仮に外国人がこの立場になったらどうか。日本語が全くしゃべれなく、知っている人がだれもいなかったら、相当辛いだろう。助けを求めようとしても言葉は通じないし、知っている人もいない。だれかが話しかけてくれるまでは、ただ待つしかないといったことになってしまうかもしれない。これでは、異文化の人にとって住みやすい環境だと僕には思えない。

僕のアメリカでの経験から思うことは、日本人でないからや、日本語が通じないからといって話しかけないままにはせず、どうにかして日本語でもいいから言いたいことを伝えようと努力してみる事が大切だと思う。話しかけるといっても、自分の知りたいことを並べて質問責めにすることは、相手を助けるどころか、場合によっては逆にプレッシャーを与えてしまうかもしれない。ただ興味本位で話しかけるのではなく、相手が本当に必要としていることを伝えようとするのが重要だと思う。まずは、何を知らたいのかを理解しようとするのが、その人にとっては一番ありがたいのかもしれない。

島国の日本は外国との交流が少なかったため、違う考えや文化を受け入れるのに、少し時間がかかるようになってくるのかもしれない。多文化共生社会を築き上げることが、違いを受け入れ理解し合おうとすることから始まると思う。

【佳作】

外国人だからこそ

豊田市立保見中学校 三年 都築 知奈美

私が通っている中学校には、外国人がたくさんいます。ブラジル、ペルー、フィリピンなど、国籍は様々です。先生たちの中にも、日本語もポルトガル語も話せる先生や、日本語を中心に教えている先生もいます。放課後には、エスペランサ（希望）学習という、外国人のための学習会も開かれています。

私の小学校には、外国人は一人もいませんでした。ですから、入学する前は、外国人に対して、「怖い」というイメージが強かったのを覚えています。入学してからも、目の色や肌の色の違い、時おり耳にするポルトガル語の会話に、距離を感じたこともありました。

しかし、一緒に授業を受け、放課を過ごし学校行事を経験していく中で、「外国人」であるという意識は次第に薄れていきました。同じ教室で生活し、笑い合い、ときにはケンカもする、「クラスメート」として接するようになっていったのです。

そんななる日、国語の授業でディベートを行いました。論題は「保見中学校には外国人学級を作るべきである」です。日本人も外国人も共に生活することが当たり前になっていった私たちにとっては、普段の生活を見直すよい機会になりました。

ほとんどの日本人が、今まで通り同じ学級のままでよいと答える中、外国人の意見は割れました。「たくさんの方が、違いから学ぶことがあって楽しい。」

という人がいれば、

「勉強をしていて難しい日本語もあるし、ゆっくり授業を進めてほしい。だから、外国人学級を作ってほしい。」

という人もいました。

確かに、国語や社会のような教科は外国人には少し難しいのではないかと思います。言葉の問題だけではなく、私が気づかないだけで、本当は外国人のみんなが苦労していることがたくさんあるのではないかと思います。

この中学校で三年間を過ごした今、当時の私がついていた、外国人に対する「怖い」というイメージは全くありません。会ったことも話したこともない人に対して、勝手に印象を決めていたことの方がむしろ「怖い」ことであつたように思います。私は、他の学校とは少し違う、この国際色豊かな中学校で過ごしている毎日を幸せに思います。

最近、外国人の友だちから、「外国人だから」という理由で、働かせてもらえないことがあると聞きました。イメージだけで距離を置いていたあの頃の私も、同じだったのではないかと思います。私は今、ポルトガル語を教えるもらったり、宗教の話を聞いたり、外国に興味をもち始めました。私は、「外国人だからこそ」、学べることもあるのだと思うのです。